

檀家離れ

首都圏に住む人々の半数は檀那寺を持っていないことをご存知だろうか。
札幌でも寺院離れは加速している。

コンビニエンスストアのほぼ2倍もの寺院が日本にある。
目前にするなら寺院ならではの広大な敷地、建物に圧倒されるが日常は存在感が無い。
これは人を寄せ付けない敷居の高い伏魔殿を作り上げてしまった現代の宗教家の責任である。

札幌では僧侶が放火、僧侶が子どもの虐待など反社会的記事が新聞に載る。
通夜の席で司会進行の女性に怒鳴った僧侶（その日にもうひとつの通夜が控えていたため
「早く終わらせる。」と怒鳴った）
生活保護者の葬儀で布施が足りないと言った僧侶に遺体安置のお願いに訪問した葬儀社社員に「儲からない話は仏教会に行け」と言った僧侶。
さらに、中尊寺住職の淫行事件、京都の臨済宗住職が2億円の申告漏れを指摘されたことも記憶に新しい。

寄付、布施で成り立つ生活、設備を全て自分のものだと考える住職には違和感を感じる。
住職も外車、奥さんも外車、子どもも外車ではこの不景気に反感を買う。
葬儀の時だけの意味不明な読経セレモニーが僧侶の仕事になっている。
宗教を感じない僧侶に親しみなど現代人は感じない。
されど仏教を否定する日本人は少ないことも理解すべきだ。
檀家離れは僧侶への反感が全ての問題である。

日本人の繊細な感覚が僧侶の異質、異様さを嗅ぎ取る。
多くを語らず人々は僧侶、寺院と疎遠になる。
現代の寺院は事業の絶滅危惧種リストがあれば筆頭に載る。

困ったことにバブル期に日本の主要都市及び近郊のベッドタウン化で檀家数が急に増えた寺院はまだ鼻息が荒い。
そのことに気付かない僧侶が多すぎる。

さらに東日本大震災が檀家離れに追い討ちをかけることは明らかだ。
日本人全てがトラウマとなるような悲劇にも宗教家の活動が見えてこない。

マネジメントの基本がある。
教師に学校を変えられないように医師に病院、僧侶に寺院は変えられない。
外の力なくして組織の変革は無い。

戒名必要ない56%、葬式簡素派9割…読売調査 読売新聞から以下 YOMIURI ON LINE 2012/4/8
冠婚葬祭アンケートで「七五三」「結婚式・披露宴」「法要」「葬式」を簡素に行うべきの答えがいずれも90%前後に達した。
慣習やしきたりにこだわらなくてよいと思う人が増えている。
葬式を仏教式で行う場合、戒名（法名）が「必要ない」と答えた人は56%で、「必要だ」43%を上回った。